

## 一流の削蹄師を目指して

福島県農業総合センター農業短期大学校 農学部 畜産学科 1年 館内 将希

私の将来希望している職業は、牛の削蹄師です。削蹄は、牛の肢蹄バランスの安定と基本体型を維持する重要な役割を果たしています。削蹄することにより、蹄病の早期発見と早期治療にも繋がります。肢蹄が健康な場合、肉用牛の肥育では、産肉性が向上したり、乳用牛では、バランスのとれた体型や乳量アップにも繋がります。

そんな牛が死ぬまで何度も経験するであろう削蹄をする削蹄師を夢見始めたのは、高校3年生の時でした。私は当時、和牛を専攻していて、授業の一貫として東北地区削蹄競技大会を見学する機会がありました。その大会に行くまでは、将来牛に関係する職業に就職できればいいと思っており、正直削蹄師に興味がありませんでした。そんな軽い気持ちで見に行った大会は私の予想を超えたものでした。

まず最初に見たのが、牛の歩き方や姿勢、蹄の形で削蹄方針を決める「牛削蹄判断競技」の筆記試験でした。その時、一人ひとり、一つのバインダーを持って何かを書いているのを見えましたが、何一つ理解できませんでした。ただ、その後に行われた実技の迫力が凄かったのは今でも覚えています。牛の脚を持ち上げカマで削っていく人と牛が暴れるのを押さえる人が2人1組で削蹄をやっていました。その競技が終わってから模擬削蹄を見ている際に、福島県代表として大会に出場していた1人の選手とコミュニケーションを取ることができました。

その話の中で今現在、削蹄師が減ってきていることを教えていただきました。この話を聞いて牛の削蹄をする削蹄師が減少したら、牛もどんどん減っていくのではないかと私は考えました。東北地区削蹄競技大会を見学し、削蹄師に憧れを持ったのと同時に、畜産農家を減少させないために自分が削蹄師になって、貢献していきたいと思うようになりました。

私は現在、福島県農業総合センター農業短期大学校に通っています。そこで、今年の6月末に先進農家研修に行ってきました。研修先の酪農家は搾乳牛を200頭飼育している大規模な酪農家でした。そこでの仕事は、朝の6時から9時まで搾乳で、残りの午前中の仕事は次の日のエサ作りをしました。午後は牧草地の周りの草刈りやサイロ出しを体験しました。夜の搾乳は2週間の研修の内1回しか経験しませんでした。夕方5時から8時まで行いました。酪農家の仕事を2週間経験して、正直とても疲れました。私が将来削蹄師を希望していることを牧場の方は知っており、研修1日目の時に研修2週間のうち牧場の牛の削蹄を頼んでおいたと言われ、驚きと嬉しさのあまり両手が上がりました。その牧場の専門の削蹄師の方たちは4人のチームで2人1組で削蹄機に牛を入れて前肢と後肢で分かれてグラインダーを使って削蹄をする方法でした。

私は、高校の時からカマで削蹄をする方法しか見たことがなかったので、グラインダーでの

削蹄は新鮮で衝撃を受けました。カマで行う削蹄は15分から30分ほどかけていた記憶がありましたが、削蹄機に牛を入れてグラインダーで行う削蹄は、1頭に5分で驚きました。その削蹄師の方は、栃木県の方で、削蹄機にはタブレットが付いており、過去に削蹄を行った履歴が出てきたり、治療履歴が出てくるものでした。また、削蹄をしている途中で蹄の病気やケガが見つかった時は、農家に治療を促していました。

牛の肢蹄は、第2の心臓と呼ばれています。心臓から遠く離れた蹄は、どうしても血液の巡りが悪くなりがちです。蹄自体が歩くたびに負荷による伸縮を繰り返して、ポンプの役割を果たし、蹄の血液循環を促進しています。蹄が伸び過ぎたり、変形したり、あるいは牛の運動量が少なくなったりすると、第2の心臓ともいべきこのポンプ作業も低下します。その結果、蹄の健全性が損なわれて、さまざまな蹄病やトラブルが発生し易くなります。牛の定期的な削蹄は、蹄病の早期発見にもつながり、牛の健康の向上に大きな影響を与えます。

また、乳牛は泌乳量の増加や耐用年数の延長、肉牛では肥育効率の向上が研究結果として発表されていることが、調べて分かりました。ホルスタイン種の雌牛における育成期の削蹄効果という資料を見たところ、分娩前の増体を促進し、分娩後の乳房炎発症を抑制する効果が出たと書いてありました。

私が研修に行った牧場は、育成牛の削蹄を行っているところは見ることができませんでしたが、分娩を経験している搾乳牛は1年に2回の削蹄を行っていると聞きました。その牧場は、福島県内でも2番目に入る乳量を生産している牧場でした。削蹄がすべてで乳量が高いとは言いきれませんが、少なからず削蹄で乳量が上がっていることが、家畜改良センターなどの研究結果で分かっています。この先の肉牛の生産、乳牛の乳量の増加を目指して、将来の畜産農家を減少させないために、一流の削蹄師を私は目指します。

私は、この一流の削蹄師を実現させるために、高校の時から積極的に牛と触れ合うことを心がけています。高校の牛を削蹄する時、東北地区削蹄競技大会の時に会った削蹄師の方が削蹄に来てくれましたが、その時も削蹄の助手として積極的に手伝いをさせていただきました。

私は、農業短期大学校を卒業後、大会で出会った削蹄師の方に弟子入りする予定です。一人前になるまでに何年かかるか分かりませんが、師匠となる削蹄師の方が持っている技術や知識を全て習得し、一流の削蹄師になりたいと思います。早く弟子入りしたいという焦る気持ちはありますが、今は、この農業短期大学校で牛の生態や1頭1頭の性格など自分なりの牛の立ち方など酪農経営について一生懸命勉強したいと思います。機会があれば是非、実習の中で牛の削蹄をやってみたいと思います。

将来、日本の酪農が現在より大規模になり乳量も今より増加するというのが私の願いです。そのために私は、牛の削蹄師という立場でこれからの酪農を支えていきたいと考えています。

---

削蹄師と言えば館内削蹄師と言われるようにになりたいです。

この夢が現実になるように、農業短期大学校でも実習や勉強を進んでやっていきたいと  
思います。